

モモ 9月から年末までの活動報告

1. 養蜂活動の準備

シュタイナーの治療教育を世界的に展開するキャンプヒル運動（シュタイナー派の医師カール・ケーニッヒが1939年にスコットランドで始める）は蜂蜜の香りに治療効果を見出し施設での療育活動に養蜂や蜜蝋作りを取り入れています。私たちもこの活動を支持し、モモを開所する1年前に、私が勤務する広島大学で地元東広島のBeeBeeクラブの神尾氏に養蜂技術を学び、開所の際に養蜂活動を教育に組み込み、スタートすることができました。

神尾氏の指導の下、巣箱作りから始めました。私たちが取り組んでいるのは、日本蜜蜂の養蜂です。日本独自の固有種でありながら、近年は環境等の問題で地域によっては生存が危ぶまれています。日本ミツバチは、西洋ミツバチよりも小型で攻撃性はありません。とはいっても弱いわけではなく、襲ってくるスズメバチに対して、集団で包み込み、その熱で焼き殺す智慧と力を持っています。日本ミツバチの蜜は西洋ミツバチに比べ一群から少量しか採れませんが、「百花蜜」と言われるように、3キロ四方の草木の花蜜を採ってきますので、まろやかでいろいろな味が楽しめます。何より安全性が高く、子どもたちの観察には最適です。

事前の養蜂活動は、広島大学の許可をもらい、大学がもつ農場で農場の先生方のサポートも得ながら行いました。採蜜には私のゼミ生たちも手伝ってくれました。

☆巣箱作り



☆分蜂群が欄の一種の金稜辺に集まります。金稜辺は女王蜂のフェロモンと同じ香りがします。



2. モモでの日本ミツバチの採蜜

北九州で展開する私たちの施設モモでは、地元の山田緑地で養蜂をてがける「山田緑地ニホンミツバチプロジェクト」の代表である枡本氏から指導を受けて進めています。スタッフとともに、山田緑地で開催される養蜂講座に参加し、知識と技術を身につけました。モモの最初のニホン蜜蜂の群れも枡本氏が寄贈してくださいました。



☆モモでの採蜜

9月にモモで初めての採蜜を行いました。当日は、たくさんの保護者のご家族で来られ、皆で採蜜体験を行いました。手作りパンに採れたての蜂蜜を付けておいしくいただきました。皆さん、「市販の蜂蜜よりもおいしい」「味がまろやかですね」など高評価でした。



3. 蜜蝋作り

採蜜のあとに残る白い巣の部分（これが蜜蝋となります）を利用して蜜蝋を作ります。まず、搾ったあとの巣をたっぷりの水と一っしょに煮ます。白い部分が溶けたら、ボールに布を張り濾したあとに搾りながら濾過していきます。ボールの中の液体が冷めると、黄色の蜜蝋の塊が上層部に固まります。それを器に取り出し湯煎し、型に流せば美しい蜜蝋のできあがりです。



☆ 蜜蝋ろうそく作り

用意するものは、蜜蝋、クッキングシート、それに、ろうそくの芯です。まず、できた蜜蝋を長い缶の入れ物に入れて、湯煎して溶かします。その缶をテーブルに置きます（本当はコンロなどで弱火にかけながら行います）。芯はあらかじめろうそくの長さに切りそろえ（8本くらい）、クッキングシートの上に並べて置きます。その芯を1本ずつとり、缶の中の溶けた蜜蝋にたっぷり浸けて、ゆっくりと引き上げます。すると、うっすらですが蜜蝋が芯にまとまります。それをクッキングシートの上にそうっと置きます。つぎの芯も同様に蜜蝋に浸けては並べます。この作業を50回くらい繰り返すとうろうそくの形ができます。黄色い美しい蜜蝋ろうそくのできあがりです。そして、この過程でなによりもすばらしいことは、丁寧な動きの落ち着いた雰囲気に加え、治癒効果のある蜜の香りが部屋中に広がり、その香りの中で作業することです。蜜が薫るなか、子どもたちも保護者もできあがった手作りの美しい蜜蝋に感動していました。



4. 蜜蝋クリーム作り

蜜蝋体験の最後は、蜜蝋クリーム作りです。これまで同様、蜜蝋を湯煎し溶かします。それに、ベースとなるホホバオイルを加えて混ぜます。この2つの液体をまぜたものをクリーム容器に入れ、そこにラベンダー、ローズマリーなどの好みの精油を数滴垂らし、箸などですばやく混ぜます。保湿や美肌効果の高い蜜蝋クリームの完成です。使用した保護者の方からは、「スキンケアに利用したけれど、とてもしっとりしてとても良かったです」、との声をいただきました。



☆椿油作り

散歩の際、森に椿の種を見つけ、それを皆で集め、椿油作りをしました。

まず、ひろってきた椿の種を割って中の実を取り出します。初めは、種を金槌で割ることを教えました。金槌の場合は力加減がむつかしく、強くたたきすぎると殻といっしょに実もつぶれます。力が弱いと割れません。しかし、何度も試みるうちに力の入れ方が分かってきて上手に割れるようになります。つぎは、二つの種割り器の使い方を教えます。木の種割り器は主に梅の種を割る時に使われ、金属の種割り器はニンニクを潰すときなどに使われますが、今回はこれらで椿の種を割ってみます。皆、種割りを楽しみながら数日かけて頑張ってくれたので、すり鉢一杯の実を取り出すことができました。

つぎは、その取り出した実をすり鉢で潰していきます。実をすり鉢に入れ、すりこぎを廻しながら砕いていきます。子どもたちは、すり鉢もすりこぎも初めて使うようでとても興味をもって取り組みました。

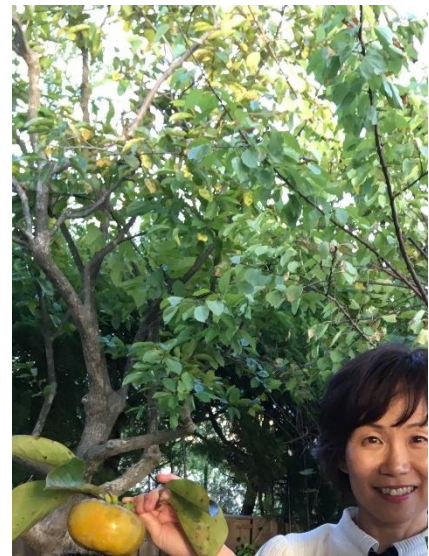


すりつぶした種は蒸し布に包み、蒸し器にかけます。蒸し上がると、布で包んだまま手回し搾り器に入れます。蓋をして、上部のレバーを廻して蒸した実を搾ります。小さい子から順番に廻していき、最後はスタッフが力のかぎりレバーを廻し、搾りきります。それでも「椿オイルは出てこないねー」とがっかりしていましたが、搾り器を傾けると、黄金色に輝くオイルがつぎつぎと流れ出てきました。皆、その美しさに大感動でした。椿油をそれぞれ手に付けると、甘い香りがして、子どもたちも「いい匂い！」と喜んでいました。自然の種の恵を感じとってもらえたと思います。





☆柿取り



施設隣の自宅の柿が色づいてきました。子どもたちのために熟れるまで待っていたのですが、野鳥が食べに来ているので、早めに収穫することにしました。

取り方は、昔ながらの竹で取る方法で行いました。裏庭の竹を切り出し、竹の先に10cm くらいの切れ目を入れます。その先端で柿の実の付け根の枝をはさみます。はさむことができたなら、実が付いた枝をはさんだまま竹をねじると、柿が取れます。

子どもたちは最初、「竹で取れるの？」と疑っていましたが、実際にやってみせると「ぼくもやりたい！」と皆つぎつぎに竹を手に取り、竹取に挑戦です。スタッフも含めひとり3個ずつくらいは収穫できましたが、まだ、切り取った竹では届かない枝に数個の柿が残りました。

そこで、倉庫から4m くらいまで伸びる高枝切りばさみをもってきました。それを使って取ろうとすると、「えー、先生、それを最初からもってきてくれれば取るのが楽だったのに！」と口々に言います。「たしかに道具があると便利だね。でもね、道具がないときでも、竹さえあれば柿を取ることがみんなできたでしょう。それをおぼえていれば役に立つよ」と教えてあげると、「それもそうだね。竹の方がモモらしいしね」と納得してくれました。今年は木になった柿が少なかったため、一つひとつが大きく、甘い味でした。子どもたちは自分で取った柿を誇らしげに自宅に持って帰りました。

☆ファンタジー（創造的創造力）を育む

シュタイナー教育では思考・感情・意志と身体とモラルを総合的に育てることを目標としています。そのなかでもとくに発達課題の基礎に置かれるのが、創造的創造力（ファンタジー）の育成です。自分の中からイメージーションを膨らます力は、私たちの力強い生き方の基盤となります。

見立て遊び



ひとは、とりわけ自我が発達する思春期以降、自分のやりたいこと（仕事・学問・趣味）を心のうちに描き始めます。また困難に出会い、その克服を自分の中で模索します。しかし、それを自分の力で見出し、行動や実践につなげられる人はかぎられてきます。なぜでしょうか？それは、意志や感動や思いの力弱く、それらが自分の内から湧き出る力とつながっていないからです。多くのおとなたちは、子どもに即効的な成果を求め、外から必要以上に干渉します。それでも子どもはお父さんやお母さんが好きなので、そのような期待に一生懸命応えようとします。

でも、子どもの心をしっかりみつめるとき、それは「いやいや行っている」に過ぎないのです。その「いやいや」がつづけば、心に抑圧が蓄積し、それは自我が高まる思春期に心身や行動の問題として噴出してくることになります。知育偏重教育にさらされた青年が、

無気力・無感動・無関心となるスチューデント・アパシーの症状や、いじめ・暴力・不登校という学校病理、さらには青少年の凄惨な事件を引き起こすことは知られています。

私たちの教育では、子どもたちのそうした心の深層の構造や発達にも目を向けます。「生きる力」を身につけ、自己の健全な思いを自らの力で実践に移すためには、「内からあふれる意欲」と「豊かな感情」「強



芸術を通して



い具体的な想念（思い）」、つまり私たちが言う「創造的創造力（ファンタジー）」が必要になります。そして、そのためには、子どもが自分の好きなことに「集中・没入」できる環境が必要となります。そうした時間を幼児期・児童期に長く確保してあげられるかどうか重要です。「イメージネーション（想念）」の力は、一般に思われている以上にすばらしく、将来、物事の本質を深く洞察し、何にも依存せず、自己の力で力強く生きていくことを可能にします。このような精神を身につけていくプロセスをシュタイナー教育では、「自由への教育」と呼びます。

自分で絵を描き学ぶ



☆手仕事

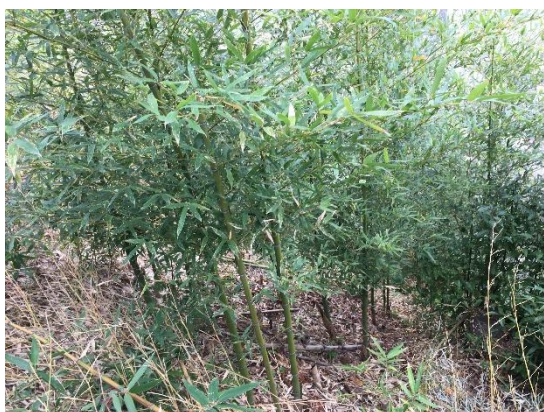


シュタイナー教育では手仕事を重視します。私たちの衣食住や文化について実感をもってかかわることは自らの生を力強くするうえでとても大切なことです。それは、頭だけで世界とかかわることとはまったく異なる体験となります。そこでは、世界について心と体の全体で感じとることができます。今回は、みんなで食事を作ったり、木工をしたり、年末に向けてクリスマス用のリースや和紙灯籠を作ったり、竹で正月の門松を作ったりしました。





和紙灯籠



☆焼き芋と畑に灰をまく



待つ間、フィンランドのスポーツ・モルックをみんなでする





焼き芋でできた灰を畑にまく（畑をアルカリ土にする）

☆餅つき

理事のひとりの中野氏が経営にかかわる福祉施設（代表の末広氏）からのご招待で、施設の餅つきに参加しました。モモでも小さな臼と杵を用意していましたので、その予行演習になりました。子どもたちもスタッフも本物の杵と臼を使ってたくさんのお餅をつきました。



モモでの餅つき



☆モンテッソーリ教育

モモでは、深い人間と発達についての理論をもち、すぐれた感覚教育を行うモンテッソーリ教育も実践しています。実際の教育には、国際的なモンテッソーリ教員資格を有する藤原江理子先生の指導のもと松本有紀先生が指導に当たります。シュタイナーとモンテッソーリはともに Theosophy（神智学）思想をそれぞれの思想の基盤にもち、両派の教員団は、教育や文化を通じて平和をめざす国連機関ユネスコの成立に大きな影響を与えました。私たちは一人ひとりの子どもの発達課題を両メソッドからアプローチしてっていきます。

